

2 ① 地域資源を引き継ぐ

■ 震災復興メモリアルとして取り組む意義

仙台藩の奨励により形成された沿岸部に広がる松林、仙台を特徴付ける居久根や農地、仙台北下の繁栄や近代化に大きな役割を果たした貞山運河など、被害を受けた仙台固有の地域資源を復興のシンボルとして、見つめ直し、引き継いでいく必要があります。

東部地域におけるみどりの再生	貞山運河の再生と利活用
<p>■ 背景</p> <ul style="list-style-type: none"> 田畑が広がる東部地域には、私たちの食を支え、土と共に生きてきた人々の生業がありました。そして、仙台藩の奨励により形成された沿岸部に広がる松林や、農家の生活とともに受け継がれてきた居久根には、自然と向き合いながら暮らす知恵や、資源の地域内循環の工夫がありました。 海辺に近い干潟や海岸公園は、多様な生物の生息域として多くの命をはぐくむとともに、大勢の市民が自然や水辺と触れ合うことのできる交流と憩いの場となっていました。 杜の都を支え、美しい景観を形成してきた東部地域のみどりは、津波により甚大な被害を受けました。 <p>■ 視点</p> <p style="border: 1px solid black; padding: 2px; text-align: center;">ともに植え、育て、支える東部地域のみどり</p> <ul style="list-style-type: none"> 東日本大震災を機に、仙台市沿岸部のみどりが持つ多面的な役割を再認識し、復興のシンボルとして市民がともに植え、育て、支え続けていくことが重要です。 居久根は農業集落の生活と密接に関わり、松林は人々の暮らしと共に存在していました。人々の暮らしが津波で被害を受けるとともに、時代も変化してきており、改めて市民生活のなかでのみどりとの関わり方を見つめ直しながら、再生に向けた取り組みを進めていく視点が求められます。 <p>■ 取り組みの方向性</p> <p>① 市民の手で植え育てる仕組みづくり</p> <p>みどりの再生のために、より多くの市民が自らの手で植え育てるための仕組みづくりが大切です。植え育てる体験や、これらを支えるといった震災からの再生のプロセスを共有することで、人々の記憶に刻まれ、その経験が語り継がれます。</p> <p>② みどりへの多様な関わり方の創出</p> <p>みどりを守り育てることに加え、そこにあった暮らしの知恵や資源循環の工夫、多様な生物の生息域としての役割も伝えるなど、市民が親しみを感じながら継続的にみどりに関わることのできる環境が求められます。そのことが、自然への興味や理解を深めることへもつながります。</p>	<p>■ 背景</p> <ul style="list-style-type: none"> 貞山運河は、阿武隈川から旧北上川河口までの仙台北下沿岸をつなぐ、日本一の長さを誇る運河です。 江戸時代に開削された区域は、仙台北下や城下町に木材や米を運ぶために用いられた、仙台北下の繁栄を支えた物流ルートでした。明治時代に全体が完成すると、近代化を支える物流ルートとしての役割を担った重要な歴史的遺産です。 また、治水や利水といった機能に加え、水辺の豊かな景観や自然環境を有していました。 貞山運河も東日本大震災による津波での被害を受け、復旧工事による再生が進められています。 <p>■ 視点</p> <p style="border: 1px solid black; padding: 2px; text-align: center;">沿岸部の歴史・自然・人をつなぐ基軸としての貞山運河の再生と利活用</p> <ul style="list-style-type: none"> 津波の被害や復旧の過程を伝えるだけでなく、もともと仙台が持つ魅力である沿岸部の歴史や豊かな自然環境、文化を伝える基軸として、再生する貞山運河を捉え、市民の知恵を結集しながら、多くの人が集える形で利活用を進めていく視点が求められます。 <p>■ 取り組みの方向性</p> <p>① 歴史や文化、豊かな自然環境を伝える</p> <p>津波の脅威だけではなく、伊達政宗公仙台北開府の歴史、運河の周りにあった人々の暮らしや憩い・生業、そして豊かな自然・生物環境などの貞山運河の魅力も伝えていくことが必要です。そのためには、貞山運河と震災を伝えることのできるガイド役などの人材が重要な役割を果たします。</p> <p>② 多様な参加の仕組みづくり</p> <p>貞山運河の魅力を多くの人に伝えるために、スポーツ・レジャー、震災の記憶と経験の継承、美しい景観、豊かな自然環境など、多様な切り口で市民が貞山運河に関わることのできる参加の仕組みをつくるのが大切です。</p>

主な関連事業

※この一覧は、各団体が取り組むメモリアル関連事業の一部を掲載したものであり、全てを網羅しているものではありません。

事業名	事業概要	実施状況	実施主体
市民の手で植え育てる仕組みづくり			
ふるさとの杜再生プロジェクト	海岸防災林をはじめとした東部沿岸地域のみどりの再生。市民参加による植樹及び育樹イベント等を実施。プロジェクトの期間は震災後概ね30年	継続中	仙台ふるさとの杜再生プロジェクト連絡会議（市民、企業、緑の活動団体、復興支援団体、まちづくりNPO及び仙台市（百年の杜推進課））
みどりへの多様な関わり方の創出			
居久根の保全・再生	杜の都の環境をつくる条例に基づく保存樹林等への指定を通じた保全や、居久根の再生に取り組む団体とそれを希望する地域団体等の橋渡しを通じた再生の支援	継続中	市民（保全主体）、民間団体（再生支援）、百年の杜推進課（保存樹林への指定等や地域団体等への橋渡し）
農業園芸センターの再整備	大きな被害を受けた本市東部地域の農業の復興に資するとともに、市民が農業と触れ合う交流拠点として整備	H28年度営業再開	農政企画課、民間事業者
歴史や文化、豊かな自然環境を伝える			
貞山運河に関する情報発信・イベント	貞山運河に関する調査研究・情報発信、地域団体との共催イベント等を実施	継続中	貞山運河研究所
荒浜灯籠流し	震災前から荒浜地区で行われている夏の風物詩	継続中	荒浜灯籠流し実行委員会
多様な参加の仕組みづくり			
海岸公園再整備事業	被災した海岸公園の再整備。スポーツ・レジャーなどによる賑わい・交流の創出、震災の記憶の継承を実施	H30年度全面再開	公園課
みんなの橋（仙台インプログレス）	アートノード事業の1つとして、貞山運河に橋の機能を持った作品などを制作する長期プロジェクト	継続中	せんだいメディアテーク
防災集団移転跡地利活用	本市の新たな魅力を創出するため、民間主体による防災集団移転跡地の利活用を推進	H29年度事業候補者決定、H30年度事業候補者二次募集中	復興まちづくり課、民間事業者
その他			
あらはまワイワイキャンパス	深沼海水浴場の本格的な再開を見据えた機運醸成や運営に係る課題の洗い出しを行うことを目的とした親水イベント	継続中	観光課
RE:プロジェクト	東部沿岸地域を中心に、そこに暮らしてきた方々から地域に根付いてきた暮らしの話を聞き、地域の記憶をつなぐ取り組み	H27年度終了	文化振興課
3.11オモイデツアー	津波被災地域に住んでいた方々と直接会い、震災前の思い出の写真をきっかけに会話・交流するなど、「オモイデ」でまちと人を結ぶ取り組み	継続中	3.11オモイデアーカイブ

まとめ

- 「東部地域のみどりの再生」や「貞山運河の再生」については、本市と市民や関係団体との連携により事業が展開されているほか、防災集団移転跡地の利活用の取り組みも行われている。
- 地域資源の活用については、上記に関わるものの他にも、海水浴場の再開に向けた取り組みや、RE:プロジェクトなど、行政や市民、それらの協働による取り組みが、新たな事業の企画も含め活発に進められている。

2 ② 記憶と経験を形にする

■ 震災復興メモリアルとして取り組む意義

時を経ても、犠牲になられた方々や甚大な被害を受けた地域、自然現象による災害の脅威を忘れないようにするために、モニュメントや遺構、アーカイブとして震災の記憶と経験を残し、伝え続けていくことが必要です。

モニュメントと遺構による記憶の継承	市民力によるアーカイブの整備と利活用
<p>■ 背景</p> <ul style="list-style-type: none"> 東日本大震災において、沿岸部では津波により多くの命が奪われました。 仙台平野は、貞観津波、慶長津波など、度重なる大津波に襲われてきた歴史があります。神社や石碑など、先人たちが後世に伝えるべく残してくれたものがあつたにも関わらず、私たちは災害対策に生かすことができませんでした。 <p>■ 視点</p> <p>犠牲者や被災地域を悼むモニュメント整備と津波の脅威を実感できる遺構の保存</p> <ul style="list-style-type: none"> 犠牲になられた方々や甚大な被害を受けた地域、災害の脅威を忘れないためにも、伝え続けることが大切です。 被害を受けた場所に、かつて使われていた学校や住宅基礎などが遺構としてあることは、地域の記憶や震災の脅威を伝えることに大きな訴求力を持ちます。 遺構は単体で残して終わりとするのではなく、この地域にあった人々の暮らしや営みのシンボルとして、地域の歴史、復旧・復興の過程、避難方法なども伝えながら、地域全体として継承していく視点が大切です。 <p>■ 取り組みの方向性</p> <p>① 犠牲者や被災地域を悼む場やモニュメントの整備</p> <p>手を合わせ悼む場やモニュメントを整備することによって、時を経ても、犠牲になられた方々や失われた地域に想いを寄せることができます。</p> <p>② 津波の脅威を実感できる遺構の保存</p> <p>実物があるからこそ被害の大きさを実感し、事実として受け止めることができます。そして、もともとその地域に住んでいた方々の意見を反映させながら、遺構を保存・活用することが、地域の記憶を伝えることにもつながります。</p>	<p>■ 背景</p> <ul style="list-style-type: none"> 東日本大震災においては、仙台市沿岸部、丘陵部、中心部など、一人ひとりがそれぞれの場所で被災し、同じ仙台市内であっても被災の状況は地域ごとに異なるものでした。 阪神・淡路大震災、新潟県中越大地震が起こった時期に比べ大幅に情報化が進んでおり、被災者自らが撮影した写真などの個人の記録が多く存在します。 甚大な被害を受けた地域では長年営まれてきた暮らしが断絶するなど、震災前後で状況は大きく変化し、暮らしや人々の想い、被害の甚大さを伝えることは時が経つにつれ困難になります。 <p>■ 視点</p> <p>感情や想いも含めたアーカイブの整備と、市民による語り継ぎ・発信の継続</p> <ul style="list-style-type: none"> 被災した場所や立場、家族環境などにより、被災状況はそれぞれ異なります。 震災にまつわる出来事や事実を記録・保存する従来のアーカイブだけでなく、より深く伝えるために、感情や想いも含めた「記憶のアーカイブ」の整備を行う必要があります。そこには市民が関わりながら個々の記憶を共有し公のものにしていく「編集」の作業が必要となります。 人々が被災前の暮らしや営みを振り返り、語り、記憶を伝えていくための場や、アーカイブが時代や地域を越えても活用され、さまざまな人々によりよく伝わるようにする視点が求められます。 <p>■ 取り組みの方向性</p> <p>① 市民一人ひとりの想いを含めたアーカイブの整備</p> <p>被災前の風景、暮らしや営み、震災による被災状況、復旧・復興のプロセスなどを、そこに含まれる感情や想いも含めながら、収集・記録・整理・編集・保存し、活用できるアーカイブを整備することが求められます。また、資料の収集や編集に際し、被災された方々など多くの市民が関わる機会をつくることで風化を防ぎます。</p> <p>② 震災の経験を伝えるための拠点整備</p> <p>アーカイブの拠点があることによって、多くの市民が関わり交流しながら、膨大な量の記憶や経験を収集・記録・整理・編集・保存し、活用することができます。</p> <p>③ さまざまな手法での伝え方</p> <p>震災遺物の保存や展示、被災地域にあった風景や記憶の再現、被災された方々への聞き書き、また絵本や絵、小説など多様な手法や表現方法を用いて、感情や想いを含めた震災の記憶がさまざまな人々に届くようアーカイブ化を図っていくことが大切です。</p>

まとめ

- 東部沿岸地区におけるモニュメント整備や遺構保存は整備事業がほぼ終了している。
- 本市や様々な機関におけるアーカイブの取り組みや、観光分野の情報発信、情報誌発行、シンポジウムの開催など、様々な形で震災の記憶と経験を伝えようとする取り組みが展開されている。
- アーカイブの連携や収集された様々な資料の活用、多くの市民が関わる機会の創出等（本市の中心部拠点の整備を含む）や、整備された遺構の継続的な保全・公開のあり方等は今後の課題である。

主な関連事業

※この一覧は、各団体が取り組むメモリアル関連事業の一部を掲載したものであり、全てを網羅しているものではありません。

事業名	事業概要	実施状況	実施主体
犠牲者や被災地域を悼む場やモニュメントの整備			
地域モニュメント	中野、南蒲生、新浜、荒浜、六郷東部、藤塚の6地区において、震災の記憶の継承と追悼・鎮魂を目的に、津波で失われた地域の歴史や暮らしを刻んだ地域モニュメントを整備	H30年度整備完了予定	復興まちづくり課、若林区まちづくり推進課
津波の脅威を実感できる遺構の保存			
震災遺構整備	津波の脅威や威力を伝える場として、被災した仙台市立荒浜小学校と荒浜地区の住宅基礎を震災遺構として保存	H31年度整備完了予定	復興まちづくり課
市民一人ひとりの想いを含めたアーカイブの整備			
震災関連公文書の保存	震災関連公文書を含む歴史的公文書等を保存するための施設「(仮称)仙台市公文書館」を整備	継続中	文書法制課
東日本大震災映像等記録事業	本市が撮影した写真等を収集・整理し、ホームページ「フォトアーカイブ東日本大震災—仙台復興のキセキ」で公開	継続中	広報課
震災・復興記録誌の編さん	震災記録誌、震災復興五年記録誌、市民向け記録誌の編さん	H29年度完了	防災環境都市・震災復興室
資料レスキュー活動	震災で被災した歴史資料や文化財を救いだし、保全処置や一次保管を実施	継続中	博物館
災害エスノグラフィー調査	公的な報告書で読み取ることができないような苦労や工夫、教訓などを震災当時の職員から体験談を聞き取り記録・活用	継続中	Team Sendai (市有志職員)、大学防災環境都市・震災復興室
3.11 震災文庫	震災に関する書籍や新聞、行政資料など、震災発生当時から現在までの様々な資料を収集	継続中	市民図書館
3がつ11にちをわすれないためにセンター	市民が記録した映像等を収集し、様々な手法・表現を用いて発信・活用	継続中	生涯学習課、せんだいメディアテーク
東北地方整備局震災伝承館	東北地方整備局が運営する震災のデジタルアーカイブ	継続中	国土交通省東北地方整備局
東日本大震災アーカイブ宮城	宮城県が構築したデジタルアーカイブ。震災に関する行政資料や写真・冊子等をデジタル化し、ウェブで公開	継続中	宮城県
みちのく震録伝	東北大学が運営する震災のデジタルアーカイブ	継続中	東北大学
河北新報震災アーカイブ	河北新報社が運営する震災のデジタルアーカイブ	継続中	河北新報社
3.11 オモイデアーカイブ	「3.11からはじまる、まちと人のオモイデアをキロクする」をテーマに市民協働で取り組むアーカイブ。3.11 定点撮影プロジェクトや3.11 オモイデアツアーを実施	継続中	3.11 オモイデアーカイブ
震災の経験を伝えるための拠点整備			
本市のアーカイブ拠点	中心部震災メモリアル拠点と合わせて検討中		
NHK 仙台放送局メディアステーション	東日本大震災発生時のニュースや震災に関する番組、VR映像などを社屋で公開	継続中	NHK
みやぎ生協東日本大震災学習・資料室	被害状況やみやぎ生協の被災者支援、復旧・復興に向けた取組みを展示や映像で紹介	継続中	みやぎ生協
さまざまな手法での伝え方			
市民センター講座	ミュージカルや施設見学、講話など、様々な手法で記憶を伝える講座を開催	継続中	青葉区中央市民センター
朗読劇「語り継ぐ震災の記憶」	津波で被災された13名の方々の経験をまとめた冊子「語り継ぐ震災の記憶」をもとに制作された朗読劇	H29年度定例開催終了、今後不定期開催予定	若林区中央市民センター
宮城野区文化センター震災復興交流事業「あなたのオモイそれぞれのカタチ」	震災の記憶を風化させないためにそれぞれの思いを語り合う場と新たなつながりを生むため、朗読会や上映会、コンサート、防災ゲームなどを開催	継続中	宮城野区文化センター、宮城野区まちづくり推進課
東日本大震災アーカイブ語り部シンポジウム「かたりつぎ」	みちのく震録伝で収集した東日本大震災の震災体験者の記録をもとに、震災の記憶を語り継ぐイベント。2012年3月から毎年開催	継続中	東北大学
書籍「震災学」の発行	震災を多角的に考え、発信する雑誌を2012年度から毎年度発行	継続中	東北学院大学
上記の外、震災遺構整備、3.11 震災文庫、3がつ11にちをわすれないためにセンター、伝える学校など			
その他			
プラネタリウム特別番組「星空とともに」	被災者から寄せられた星と震災にまつわるエピソードをもとに仙台市天文台が制作したプラネタリウム特別番組。全国のプラネタリウムも協力し投影	継続中	仙台市天文台
防災観光	防災観光に関するプログラムや被災地の360°画像をWEBで発信	継続中	宮城県、仙台市(東北連携推進室)
復興関係研修	本市職員を対象に震災復興への理解を深めることを目的に研修を実施	継続中	防災環境都市・震災復興室
他都市出張講演会	他都市の職員向け研修等に出張し、本市の経験を講演	継続中	防災環境都市・震災復興室
WEB・ニューズレター	WEB「防災環境都市・仙台」やニューズレター「えーる」で防災・減災・環境に関する情報を発信	継続中	防災環境都市・震災復興室
国際会議での発信	国連等が主催する国際会議に出席し、本市の経験を発信	継続中	防災環境都市・震災復興室
仙台防災未来フォーラム	震災の経験や教訓を踏まえ、市民が継続的に防災を学び発信する場として、フォーラムを毎年開催	継続中	防災環境都市・震災復興室
NOW IS	宮城県内の復興の状況や復興に向けて取り組んでいる方々の「いま」の姿を発信する情報誌	継続中	宮城県
津波浸水表示板の設置	津波の浸水区域や浸水高さを現地に表す標識等を設置	継続中	宮城県
津波防災シンポジウム	5月のみやぎ津波防災月間や11月の津波防災の日のイベントとして、津波防災意識の向上を目的に開催	継続中	宮城県
津波防災パネル展	県庁広報室等における常設展示をはじめ、各種団体の主催イベント等で広く開催	継続中	宮城県
災害伝承10年プロジェクト	東日本大震災の被災地の市町村職員、消防職団員、婦人防火クラブ及び自主防災組織の方々を語り部として全国の市町村や学校等に派遣し、市町村職員や地域住民、児童生徒に災害時の体験・教訓を伝承	継続中	総務省消防庁
海岸公園冒険広場における発信	公園内に震災時の状況を示した看板等を設置。震災発生時やその後の状況を記録、資料にまとめ発信し、要望に応じてスタッフによる解説を実施	継続中	公園課、冒険あそび場—せんだい・みやぎネットワーク
被災地における桜の植樹	津波の記憶を後世に伝えるため、震災の津波到達地に桜を植えるプロジェクト。複数の民間団体が実施	継続中	左記のとおり

2 ③ 明日へ向かう力を育てる

■ 震災復興メモリアルとして取り組む意義

震災後に勇気づけられた文化・芸術の力による創造、震災の記憶と経験をふまえた総合的な学びが、これからの災害を乗り越え、震災の記憶と経験を未来へ、世界へと、つなぐ力となります。

文化・芸術の力を復興と記憶の継承に生かす	知り学ぶ機会をつくる
<p>■ 背景</p> <ul style="list-style-type: none"> 震災直後、身近な人とのつながりや国内外からのたくさんの支援、自らがまたは他者が行う文化・芸術の取り組み（音楽・アート・スポーツ・祭りなど）の力が、沈んでいた私たちの心に勇気を与えてくれました。 犠牲者への祈りと鎮魂の想いを込めて、慰霊祭などの取り組みも各地で行われています。 <p>■ 視点</p> <p>祈りと鎮魂を含めた文化・芸術の取り組みを復興と記憶の継承の力に</p> <ul style="list-style-type: none"> 時を経ても、犠牲者への祈りと鎮魂の想い、つながりや支援への感謝を忘れずに、震災の記憶を継承していくことが重要です。 震災時に励まされた気持ちを想起させ、また、自らの心を奮い立たせ癒す力を持つ文化・芸術の力を、復興の推進力としてつなげていくことが求められます。 文化・芸術の取り組みにより創成されたものは、長く継承される可能性を持ちます。また、祈りと鎮魂の想いを、言語の壁を越えて伝えることができ、世界へとつなぐ力になります。 <p>■ 取り組みの方向性</p> <p>① 文化・芸術による取り組みの推進</p> <p>震災を契機にその意義が見つめ直され、もしくは新たに始まった祭りや催事、沈んだ気持ちに希望を与えてくれたスポーツや音楽・芸術などの表現活動を大切に、市民に根付いたものとしていくことが必要です。</p> <p>② 文化・芸術による取り組みを将来につなげるための拠点整備</p> <p>文化・芸術の力を将来や世界へつなぐとともに、その力が仙台のまちの活力となり、さらには東北全体の復興にも波及するように、復興のシンボルとなる拠点が重要です。</p>	<p>■ 背景</p> <ul style="list-style-type: none"> 津波被災に関して、先人の伝承があったにも関わらず、これまでの私たちの多くは受け止めていませんでした。この東日本大震災を機にその反省の上に立つ必要があります。 また、震災以降、歴史的・科学的視点から被災地に関するさまざまな調査が行われ、被災地域が見つめ直されています。 <p>■ 視点</p> <p>地域を見つめ、自らが判断・行動・創造する力を育むための、総合的な学びの機会の創出</p> <ul style="list-style-type: none"> 災害発生時においては、一人ひとり自ら判断し、行動する力が求められます。そのためには自分の住む地域の成り立ちなどの歴史や、自然のメカニズム、災害が発生する背景などについて理解を深めること、また、五感を通じた常日頃からの体験により、自分で判断できる力が培われることが大切です。 地域の魅力や人との出会いがあることで、震災の記憶と経験を伝え続けることにつながります。 震災の記憶と経験やその後に生まれた気づきを、今後の災害への備えにつなぐ視点も求められます。 <p>■ 取り組みの方向性</p> <p>① 自然現象や災害を知り学べる環境の整備</p> <p>地域の成り立ちなどの歴史や、自然のメカニズム、震災の記憶と経験などを、市民や来訪者が現地で知り学べる環境が求められます。被災地域を訪れ体感するフィールドワークの仕組みをつくることで、市民一人ひとりの新たな気づきにつながります。</p> <p>② 人材の育成</p> <p>知り学ぶ際には、人や地域との関わりがあることが、私たちの新たな気づきや思考の深化を促し、被災地域をより身近に感じさせます。そのような、人や地域との出会いを生み出すために、震災の記憶と経験を語り継ぐことができる語り部、それをつなぐ役割となるコーディネーターやガイドなどの育成が求められます。</p> <p>③ 3月11日の過ごし方</p> <p>毎年3月11日は、仙台市民が東日本大震災に想いを馳せる日とし、東日本大震災を考える取り組みを継続して実施していくことが、市民の震災への意識を深化、展開させます。</p>

まとめ

- 「文化・芸術の力」については、様々な取組みや拠点となる音楽ホールの検討が進んでおり、「知り学ぶ機会」についても、メモリアル交流館の企画展によるフィールドワークの実施や大学・報道機関等と連携した人材育成、追悼関連行事等が行われている。
- 多様な主体の取組みについて、これらの連携と継続を図り、世代を超えて震災への意識を持ち、深め、学んでいく仕組み・環境を整えていくことが今後の課題である。

主な関連事業

※この一覧は、各団体が取り組むメモリアル関連事業の一部を掲載したものであり、全てを網羅しているものではありません。

事業名	事業概要	実施状況	実施主体
文化・芸術による取り組みの推進			
東北絆まつり（東北六魂祭の後継）	東北6県の各県庁所在地の代表的な6つの夏祭りを一同に集めた祭り。東日本大震災の鎮魂と復興を願い、東北6県で持ち回り開催	継続中	青森市、盛岡市、秋田市、山形市、福島市、仙台市（東北連携推進室）
復興コンサート	音楽が震災後に果たしてきた役割やその力を後世に伝えるため、月命日にメモリアルコンサートを開催するほか、プロの音楽家がさまざまな場所に向き、被災した方々の心に音楽で寄り添い、地域再生を願って演奏会を行うもの	継続中	文化振興課、音楽の力による復興センター・東北
文化芸出による子供の育成事業	子どもたちが健やかで安心できる環境の醸成を図るとともに、円滑な地域の復興に資することを目的として、学校・幼稚園・保育所・児童館等に芸術家を派遣する事業	継続中	文化振興課、市民文化事業団、地域の文化芸術団体
仙台市文化プログラム	東京オリパラの開催を契機に創出した事業で、地域の文化芸術分野における多様な資源を活かした文化事業の企画を公募し、仙台市、市民文化事業団との協働で実施するもの。「震災や復興を主題としたプログラム」を募集テーマのひとつとしている	継続中	文化振興課、市民文化事業団
3.11 文学館からのメッセージ	震災を契機に全国の文学館が独自の企画で同時開催する展示。2013年3月から毎年3月に開催	継続中	仙台文学館など全国の文学館
文化・芸術による取り組みを将来につなげるための拠点整備			
音楽ホール	復興の力となった文化力を社会に活かすことを設置目的の1つとする音楽ホールの整備に向けた検討	継続中	文化振興課
自然現象や災害を知り学べる環境の整備			
メモリアル交流館の企画展（フィールドワーク）	メモリアル交流館の企画展として、沿岸部を回り体験するフィールドワークを実施	継続中	防災環境都市・震災復興室
人材の育成			
伝える学校	震災の記憶と経験を後世に継承していくため、市民自らが感情や想いも含めて伝えるための手法を学び、実践するプログラム（3.11 オモイデツアー、聞き書き-あの人に会いに行く、3.11 未来会議、街からの伝言板、60秒で伝える3.11 ムービー、「震災メモリアル」の展示会をつくろう）	H28年度終了	市民、民間団体、市民協働推進課
311『伝える／備える』次世代塾	学生や若手社会人を中心に東日本大震災の伝承と防災啓発の担い手を育成するための通年講座	継続中	報道機関、大学、仙台市、企業等
大学等と連携した未来の担い手づくり	震災の経験や教訓を伝えるとともに、防災環境都市づくりや仙台防災枠組の理解・浸透を図るなど大学等と連携して防災の担い手づくり事業を実施。取組みの1つとして、平成30年6月に仙台市立高等学校新任教員及び宮城教育大学教職、大学院生を対象として荒浜小学校の視察研修を実施	継続中	防災環境都市・震災復興室
復興大学 復興人材育成教育	復興支援の担い手、今後のリーダーとなる人材育成教育事業として、学生に加え一般県民を対象に、復興の政治学から経済学、社会学、思想、生活構築学および科学技術までの6科目30講座を開講。広く応用可能な教育内容を実施することにより、人間・社会・技術などに関する基本的素養と広い視野を育成。併せて、被災地の復興状況を巡り、防災・減災を学ぶ現場実習を実施	継続中	学都仙台コンソーシアム
3月11日の過ごし方			
市追悼式典	本市主催の追悼式典	継続中	秘書課
キャンドルナイト	民間主催の追悼式典。平成29年3月まで仙台青年会議所が主催。平成30年3月から地元高校生が主体となった実行委員会が主催	継続中	3.11キャンドルナイト実行委員会
HOPE FOR project	元地域住民や一般市民が3月11日に想いを寄せる場として、地元小中学校の卒業生が中心となり、花の種を入れた風船を荒浜小学校で空へリリースし、音楽室にて荒浜に縁のあるアーティストが演奏するイベントを実施	継続中	HOPE FOR project 実行委員会
その他			
七夕の折り鶴（故郷復興プロジェクト）	仙台市立185校の小中学校、特別支援学校、中等教育学校の子どもたちが、ひとつひとつ手作りした折り鶴で七夕飾りを制作（共催：仙台市PTA協議会、仙台市七夕まつり協賛会、鳴海屋紙商事株式会社、株式会社藤崎等）	継続中	仙台市教育委員会（教育相談課）
仙台版防災教育	従前の防災教育のあり方を見直し、平成23年度に新たな防災教育の指針を作成、平成28年度より仙台版防災教育として取組を推進している。防災教育副読本・防災教育実践ガイドを作成し、活用を図っている。平成27から32年度にかけて全市立学校を研究推進取組発表校に指定し、実践内容を発表	継続中	教育指導課
防災運動会	災害への備えを体で学ぶ取組みとして、みやぎ防災・減災円卓会議が中心となり平成30年6月に開催	継続中	みやぎ防災・減災円卓会議
今できることプロジェクト	時々の「できること」を考えながら、新聞読者と一緒に行動する復興支援プロジェクト。各地の観光支援や防災情報の発信、小中学生向けのワークショップ、授業等を実施	継続中	河北新報社

3 拠点整備による事業展開

拠点整備による事業展開

これまで掲げてきた各取り組みを有機的に結び、震災の記憶と経験を、未来や世界へとつないでいくためには、継承のための拠点が必要です。仙台市では、中心部と沿岸部でそれぞれの場所の特性を生かしながら事業を展開することが有効であると考えます。

(1) 継承のための拠点

- ・拠点整備にあたっては、被災の跡が見えなくなった中心市街地と、津波による被災の跡が残る東部地域という、近いながらも被災状況に違いのある二つの地域をつなぎながら震災の記憶と経験を伝えることが大切です。
- ・拠点には、東北の中心都市として、東北各地、宮城県沿岸部への訪問につなげる玄関口の役割を果たすことも求められます。

(2) 中心部と沿岸部拠点の役割分担

- ・中心部の拠点は「震災の記憶と経験を収集・編集・発信する拠点」として、市民一人ひとりの震災体験、津波被災・宅地被災の状況、長期化した不自由な生活の様子などを、そこに込められた想いも含め収集・編集し、発信する役割を担います。
- ・沿岸部の拠点は、津波被害を受けた現地を訪れ、震災の記憶と経験を学び沿岸部回遊の出発点の役割を担います。

■ メモリアル拠点に求められる機能

① 中心部の拠点

- ・震災の記憶と経験の収集・編集の継続
- ・市民が震災を語る場
- ・東日本大震災の全体像がわかる展示

② 沿岸部の拠点

- ・東部地域の回遊に必要な情報の展示
- ・フィールドワーク活動のプログラムづくり
- ・人の想いも含めた伝え方につながる活動

■ 中心部拠点と沿岸部拠点の連携

- ・未来や世界へと、震災の記憶と経験を伝えていくためには、2つの拠点が連携することが効果的だと考えます。例えば、中心部で収集された資料や記録などを沿岸部の拠点で見ることができる、東部地域を訪れた人々の記録や感想などが中心部でアーカイブされる、中心部の拠点でのシンポジウムと現地視察を組み合わせたイベントの開催などが考えられます。

4 組織設置と協働による事業推進

組織設置と協働による事業推進

■ 背景

- ・これまで掲げてきたメモリアルに関する事業は、多くの分野や実施主体にまたがる複合的なものです。そして、未来の市民を含め全ての市民に関わり、他地域での備えへもつながるものです。
- ・被災状況や震災に対する想いは地域や個人ごとに異なります。また、被災された方々が向き合っている状況は時間の経過とともに変化しています。

■ 事業推進にあたって必要とされること

① 組織の設置

多岐にわたる事業を統括し継続していくために、仙台市が事業推進の核となる組織を設置し、施策の立案・実施、定期的な事業評価・振り返り、積極的な国内外への情報発信を行うことが求められます。

② 多様な主体との協働

震災の記憶と経験を広く共有し、未来や世界へとつなぐために、多様な主体が知恵を結集し信頼関係を築きながら、協働により事業を進めていく必要があります。

■ 事業推進における留意点

① 多様性と変化への対応

一つにくくることができない市民一人ひとりの震災の記憶と経験をくみとり、時間の経過による変化にも対応するために、多様な主体が協働し、それぞれが把握している情報を重ね合わせながら事業を実施することが大切です。

② 経験をつなぐ手法を生み出す

東日本大震災は、甚大な被害が広範囲に及ぶ誰も経験をしたことのない事態です。したがって、震災の記憶と経験をつなぐための手法を、多様な主体の知恵の結集により生み出し、他地域での活用へもつなげるために国内外へと発信することが求められます。他地域と知見や意見を交換することが、その手法をより良いものへと洗練させ、今後の災害への備えに生かすことにもつながります。

主な関連事業 ※この一覧は、各団体が取り組むメモリアル関連事業の一部を掲載したものであり、全てを網羅しているものではありません。

事業名	事業概要	実施状況	実施主体
中心部の拠点			
中心部震災メモリアル拠点	中心部震災メモリアル拠点検討委員会を平成30年12月に設置。平成31年1月に第1回検討委員会を開催	継続中	防災環境都市・震災復興室
沿岸部の拠点			
せんだい3.11メモリアル交流館	東部沿岸地域の玄関口として、展示や人と人の交流、フィールドワークなどを通じて震災の記憶と経験を継承する拠点	H27年度整備完了	防災環境都市・震災復興室
組織の設置			
多様な主体との協働			
メモリアル交流館協力事業	震災や地域の記憶の継承等に資する民間事業等と協力。平成29年度から平成30年度（平成30年12月末現在）までの協力実績は54事業	継続中	防災環境都市・震災復興室
本資料に記載のとおり、様々な事業が多様な主体との協働により展開されている。			
多様性と変化への対応			
経験をつなぐ手法を生み出す			
その他			
震災伝承ネットワーク協議会	岩手、宮城、福島県の3県で整備される復興祈念公園と各地の震災伝承施設等のネットワーク化を図り、交流促進や地域創生、地域の防災力強化を目的とした協議会	継続中	東北地方整備局、青森県、岩手県、宮城県、福島県、仙台市
東北大災害科学国際研究所	東北大学の英知を結集して被災地の復興・再生に貢献するとともに、国内外の大学・研究機関と協力しながら、自然災害科学に関する世界最先端の研究を推進するための新たな研究組織として設立	継続中	東北大学
みやぎ防災・減災円卓会議	組織横断的に情報や成果の共有を図るため、自治体、研究機関、民間組織、企業、報道機関などが参加する会議	継続中	東北大学、河北新報社
みやぎ連携復興センター	復興を契機に、創造的で自律的な地域社会の実現を目指し、住民主体の取り組みを支援する組織	継続中	みやぎ連携復興センター
3.11メモリアルネットワーク	将来にわたる継続的な伝承活動を支えるため、岩手県・宮城県・福島県を中心に伝承に携わる個人・団体・伝承拠点をつなぐ広域ネットワーク組織。「連携・調整」、「企画・評価」、「人材育成」を柱に掲げ、伝承活動を推進	継続中	3.11メモリアルネットワーク

まとめ

- メモリアル交流館、震災遺構荒浜小学校が設置されたほか、メモリアル事業に関わる様々な主体による連携体制づくりも行われている。
- 市民一人ひとりの経験のくみとりや、多様な主体の知恵の結集により国内外へ発信するための手法を生み出すこと、核となる組織づくり等は今後の課題である。
- 震災メモリアル事業は、多くの主体により多様な形で実施されており、本市としてもこれらと連携しながら、継続的な事業実施の仕組みをつくっていくことが、今後重要である。